

京都府出土の装飾器台について

岸 岡 貴 英

1 はじめに

近年京都府北部における発掘調査例の増加から考古資料の増加にはめざましいものがある。とくに弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけてはそれまでかなり不明な点が多かったが、良好な資料の増加により少しずつ様相が明らかになりつつある。そのような中でこの時期に見られる特殊器形として認識されつつあるのが装飾器台である。

2 研究史

装飾器台は、1970年代に関東・北陸地方を中心に研究が進展した。詳細な研究史に関しては諸墨知義氏の論考が詳しいので割愛するが、この装飾器台を含めて最初に全国的な視野で集成したものとして熊野正也氏の論文がある。熊野氏は「器台と他の器種を接合させて、一つの形状を呈するもの」の定義のもとに、当時高坏状器台、異形高坏形土器等と呼ばれていたものを含めて29例集成した。そして8つに分類し、その中で福井県原目山遺跡出土のもの(第2図-1)をI-a類としている。さらにI-a類は日本海側に多く分布している。その後、諸墨氏は器台と壺、埴、坏が結合したものや高坏状の形態をしたもので、体部や体底部に透穴や貫通孔をもつ土器群を総称して、装飾器台とした。また氏は体部に透穴のあるものを「有透穴器台」として地名表を作成し、古殿遺跡SX11出土の装飾器台(第2図-6)を掲載している。

一方で装飾器台は橋本澄夫氏によって、北陸地方を中心に分布する月影式の主要な器種として位置付けられ、以後月影式の中で研究が進められていく。その後、南新保D遺跡の報告の中で、装飾器台について検討されている。要約すると、「つまり器種構成比と言う点から見た場合、装飾器台の土器総数に占める比率は1%未満である。しかし比較的広範囲に見られることから器台形土器とは機能を異にした独立の器種としてとらえている。またその出土遺構は溝・土壇・住居址などの日常的な場所である。こういった点から装飾器台は必要に応じて使用された儀式用の土器であると思われる」。この儀式用の土器という観点は熊野・諸墨両氏も同じことを述べており、一般的な見解であろう。

その後『シンポジウム「月影式」土器について』のなかで北陸系装飾器台について検討

がなされている。その中で栃木英道氏は装飾器台の組列を提示している。また宮本哲朗氏は装飾器台の変化を横長→縦長、脚部の矮小化ととらえている。さらに地域差についても言及し、南新保D遺跡の報告で「比較的規格化されている」と報告されているのに対し「遺跡ごとに変異があり、更に地域間での変異がみられる」としている。そしてその変異の指標として透かしの数をあげている。

ところで京都府においては石井清司氏が北金岐遺跡の報告で、装飾器台を「丹後・丹波北部で出土例が知られる特殊器形」として記述している。また戸原和人氏は古殿遺跡の報告にある丹後弥生土器編年案のなかで、弥生後期後半～庄内式の段階に位置付けている。しかし全体がわかる資料が少ないため、これらの検討はあまり進んでいない。

3 京都府と他地域との装飾器台の比較検討

出土遺構 まず京都府とその周辺の地域において装飾器台と考えられるものを集成し、その分布・出土遺構の状況を把握してみた(第1表を参照)。

京都府出土の装飾器台は著者の知るかぎり現在15例確認している。地域ごとにみると丹後で12例、北丹波で2例、南丹波で1例であり、丹後に多くみられる。近隣の地域をみると月影式装飾器台と言われているものが加賀で95例、越前で13例、越中で2例見られ、そ

第1表 装飾器台出土地名表

地域	遺跡名	出土遺構	出土点数	備考
丹後	1 峰山町 途中ヶ丘遺跡	EL74~77の溝	1	北陸系？ 古墳時代前期
	2 古殿遺跡	SX11	1	
	古殿遺跡	SD02-2	3	
		SK03	1	
	3 大宮町 正垣遺跡	SD05	1	
	4 三重遺跡	表採	2	
	5 野田川町 西谷墳墓群	2号墓第1主体	1	
6 黒田遺跡	表採	1		
7 加悦町 愛宕山9号墳	第3主体部	1		
北丹波	8 綾部市 青野西遺跡	土壇6	1	
		14号住居址	1	
南丹波	9 亀岡市 北金岐遺跡	SH03	1	透かしなし
但馬	10 豊岡市 立石墳墓群	103号地点第6主体	1	丹後系
若狭	11 三方町 南前川遺跡	包含層	1	北陸系

れ以外に能登、若狭、但馬、越後、筑前、下総でそれぞれ1点出土している。

このような装飾器台の分布を見るかぎり、現状では丹後は加賀・越前について3番目に多い地域である。

ここで3地域の出土遺構の状況を比較してみた。

丹後・越前は加賀に比べ資料数が少ないため多少状況は相違するが、多様な所から出土する点は共通すると思われる。

また越前では原目山遺跡から7点とその半分近くが出土している。丹後においても古殿遺跡から5点と比較的多くみられる。これは良好な資料が少ない両地域ではあるが、弥生時代後期後半から古墳時代前期を考えるうえで少し参考になるかもしれない。

分類 装飾器台の分類については熊野氏の論文が詳しい。彼は従来、装飾器台型土器・高坏状器台・異形高坏状器台等の呼び名で呼ばれていたものをⅠ～Ⅲ類に分類し、さらにそれを細分した。彼はその分類において、Ⅰ類を「小型の器台の上部に壺型土器の口縁部や埴型土器・鉢型土器などをのせたような形のもので複数の土器を合わせてひとつの器形をなしたもの」としている。さらにそれをa～cに細分し、a類を「器台部の口縁が帯状をなすものに限る」と定義づけた。

第2表 装飾器台の遺構別出土点数表

	住居址	溝	土壇	墳墓	古墳	包含層	表採
丹後		5	2	1	1		3
加賀	20	20	12	1		24	1
越前	1			7	2		6

ここで丹後の装飾器台(古殿遺跡SX11、第2図-6)を北陸の月影式装飾器台(原目山遺跡、第2図-1)と比較してみた。これらを



第1図 装飾器台出土遺跡分布図

形態面からみると相違点は口縁部、器台部の形等多々ある。しかし器台上部全面に装飾的な透かしを施す点は共通する。そこでこれらを熊野氏の分類にあてはめてみると、ともにI-a類に含まれることになる。つまり丹後系と北陸系の違いはこのa類の細分としてとらえることができるかもしれない。さらに熊野氏は器台部の形状の相違からその地域差を導き出せるかも知れないとしている。

4 丹後出土の装飾器台

次に京都府出土の装飾器台について丹後地域を中心に比較的残りの良いものを取り上げてみた(第2図-1は福井県福井市出土、2～8は京都府出土)。以下主なものについて説明を試みる。

1. 原目山遺跡。いわゆる月影式の装飾器台であるが、方形の透かし自体は月影式の中ではあまり例がないと思われる。

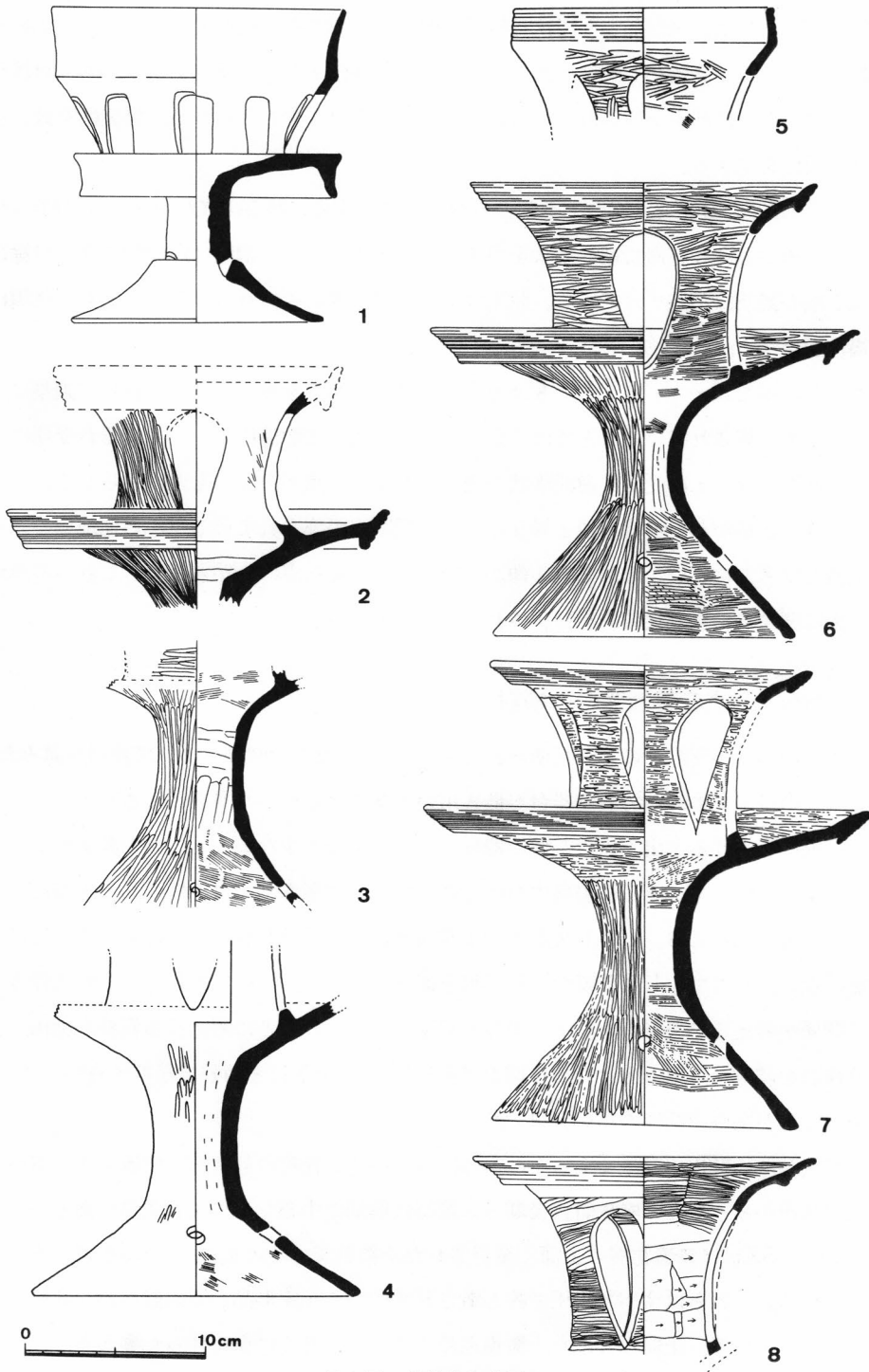
2. 古殿遺跡SD02-2。器台脚部と器台上部の口縁部は欠損しており、透かしも全体の形状がわかるものはない。しかし透かし自体は逆涙滴状を呈すると考えられる。調整はやや荒く外面にハケが施され、口縁部には5条の擬凹線が施される。胎土は普通で1.5mm大の石英、長石が多く混じる。焼成は堅致で色調は乳白色を呈する。

3. 黒田遺跡。器台下半部の脚端部と口縁部、それに器台上半部の大半が欠損している。そのため透かしの有無は不明である。調整は丁寧で胎土は密、雲母を少し含む。焼成は堅致、色調は淡褐色を呈する。

4. 途中ヶ丘遺跡。器台上半部は失われており、透かし全体の形状、またその数はわからない。しかし逆涙滴状を呈する透かしを持つ可能性がある。胎土は石英・長石・雲母を含み1.5mm大の長石が目立つ。焼成は良好で、色調は乳白色を呈する。土器の状態が悪いため調整は不明な点が多い。

5. 正垣遺跡SD05。器台上半部のみ残存している。しかもその中で残存率は20%程度であるため、全体像を復元することは不可能に近い。しかし推定5個以上の透かしをもち、しかもそれが涙滴状と逆涙滴状の透かしが施される可能性がある。調整は内外面とも丁寧にミガキがかけられ、口縁部には4条の擬凹線が施されている。胎土は密で雲母と石英がみられる。焼成は堅致、色調は淡褐色を呈する。

6. 古殿遺跡SX11。所々欠損しているがほぼ完形にちかい。逆涙滴状の透かしが4方向にあり、丁寧に仕上げられている。調整は内外面とも比較的丁寧に行われている。口縁部の擬凹線は上半部が4条、下半部が7条施されている。胎土は密で石英・長石・雲母を含む。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。



第2図 装飾器台実測図

原目山遺跡：1

古殿遺跡SD02-2：2・8

SX11：6

黒田遺跡：3

途中ヶ丘遺跡：4

正垣遺跡SD05：5

西谷2号墓：7

7. 西谷2号墓。完形品としては丹後では唯一の例である。逆涙滴状の透かしが放射状に施されているが各透かし間は一定していない。調整はかなり丁寧に行われており口縁部には8条の浅い擬凹線が施されている。胎土は密で雲母が少しみられる。焼成は堅致、色調は淡褐色を呈する。

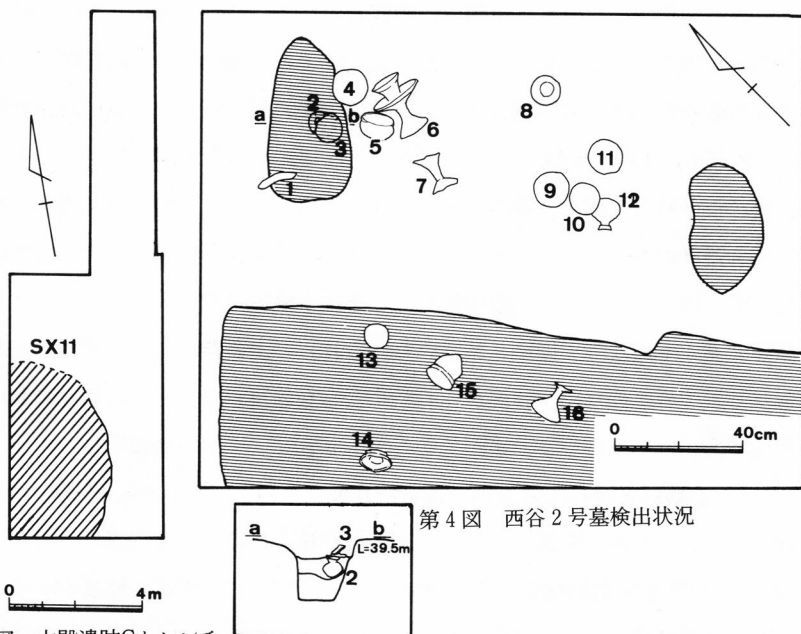
8. 古殿遺跡SD02-2。器台上半部のみ復元でき、実際に残存しているのはその半分程である。透かしは3方向で逆涙滴状を呈するものと思われる。調整は比較的丁寧で口縁部には7条の擬凹線が施されている。胎土は密で雲母が少しみられる。焼成は堅致、色調は乳褐色を呈する。

これらの中で3・5・6・7・8は非常によく似た胎土を示す。またこれらは調整についても丁寧に施されていることでは一致している。さらに形態面についても器台受部にさらに受部を設け、上段受部に逆涙滴状の透かしを設ける点が多くのものにみられる。ただ5は口縁部と透かしの形状が他と異なる。また擬凹線が施されている点から他地域の系統の土器とは考えにくい。しかし全体像が不明のため詳細な点はわからない。これらの点から丹後に関するかぎり比較的規格化されている印象を受ける。

5 丹後における装飾器台の検討

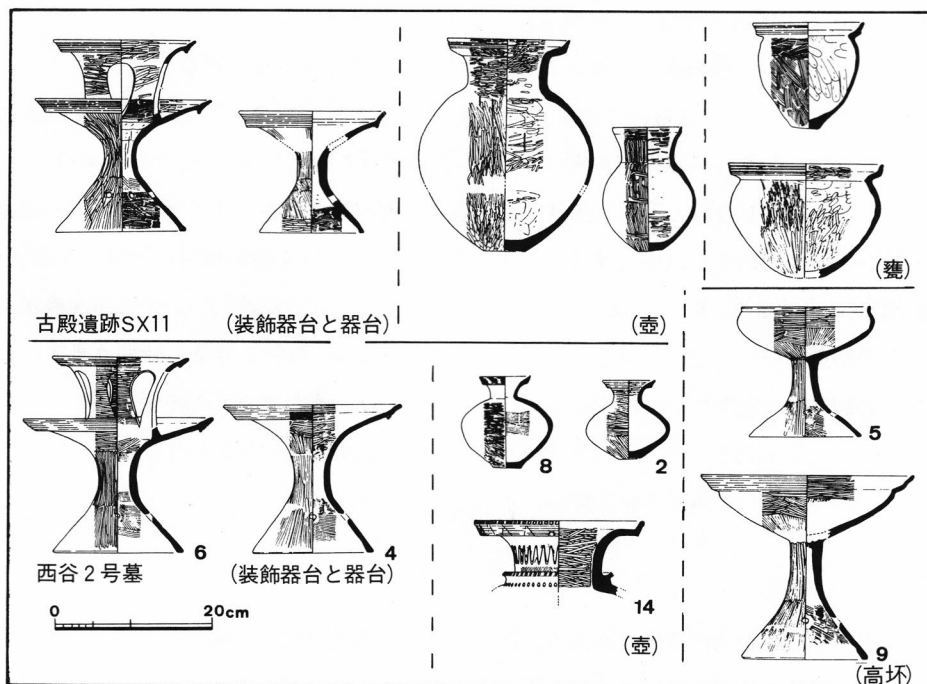
次に装飾器台が実際どのような使われ方をしたか、またその時期について検討を試みた。現在までの研究史において装飾器台が儀式用の土器であるという見方がなされている。これらの根拠をあげると出土点数が他の器種に比べてかなり少ないこと、また非実用的な形態を呈する点がある。さらに墳墓における葬送儀礼に使用された可能性のある土器として原目山遺跡の例がある。しかし実際どのような葬送儀礼が行われたかを推定することは不可能に近い。そこでもし装飾器台が儀式用土器として定立するのであれば、それに伴うセット関係を考える必要がある。そこで今回若干でも以上のことに耐えうる資料を抽出し、鋭意検討を試みた。取り上げたのは同じ丹後地域の古殿SX11と西谷墳墓群の資料である。両遺跡ともかなり一括性の高い資料である。

古殿遺跡は竹野川の支流である小西川に向ってのびる丘陵の最南端に位置する。遺構・遺物の状況からみると、弥生時代後期～古墳時代前期に中心をもつ複合遺跡である。報告によると、SX11は無遺物層の上面で発見された土器群で、その範囲は4.5mを越えるといわれている。これらはすべて土圧で押し潰されてはいるが完形品が並べ置かれた状態であったとされている。土器以外にも土製模造品がみられ、外面に煤を伴った甕が多いことが特徴的である。つまりSX11は多量の完形土器と土製品がセットをなす一場性の出土状況から祭祀的様相の濃厚な遺構と考えられている(第3図参照)。



第3図 古殿遺跡Cトレンチ SX11検出状況

第4図 西谷2号墓検出状況



第5図 古殿遺跡SX11(上)・西谷2号墓(下)出土土器実測図

西谷墳墓群は野田川に注ぐ岩屋川に面し、樹枝状に北にのびる丘陵の一つの尾根に位置する。装飾器台を出土した2号墓は丘陵を削りだして4×6m程の平坦部を作り、そのほぼ中央に埋葬施設を設ける。埋葬施設自体は長さ3.12m、幅1.98m、深さ0.88mの墓壇に長さ2m、幅0.65mの木棺を安置したものと考えられる。木棺内からは鉄製品が1点出土している。更にこの墓壇上面と2基の土壇に挟まれた部分から、装飾器台・器台・高坏・鉢・壺などの土器群がまとまって出土している。ほとんどが完形でこれらのうち地山の直上に立った状態で出土しているのも数個体ある。また土壇には朱の入った壺が蓋として使用された高坏とセットになって埋納されていた。これらの土器群は墓前祭祀にかかわるものと考えられる。このような出土状況から判断すると装飾器台はこの葬送儀礼において中心となる器種であったと推定することができるかもしれない(第4図参照)。

ここでSX11の土器群と西谷2号墓の土器群を比較してみた(第5図)。遺構の性格の違いから器種構成に大きな違いがある。しかし両者に共通する器種として壺を検討してみると、SX11のものが弥生後期的様相の中で理解できるに対して、西谷2号墓のものはより小型化・もしくは装飾化したもので新たな様相と考えることができる。また器台は同一型式内におさまるが、口縁部に注目すると西谷2号墓の方がより外傾しておりさらに擬凹線も退化が著しく後出的である。これは装飾器台についても同様のことが言える。このような点からSX11と西谷2号墓は、時期差として捉えることができよう。

以上のことから、装飾器台においてSX11〔第2図-6〕→西谷2号墓〔第2図-7〕の先後関係が成り立つ。さらにこの変遷を応用して形式組列を考えてみると、古殿遺跡SD02-2〔第2図-2〕→古殿遺跡SX11→西谷2号墓→古殿遺跡SD02-2〔第2図-8〕となる。ここで透かしの数と形態に注目してみると、透かしの全容がはっきりしない古殿遺跡SD02-2〔第2図-2〕は除外するとして、数は古殿SX11(4個)→西谷2号墓(5個)→古殿SD02-2〔第2図-8〕(3個)となり、ほとんど変化しないに等しい。また逆涙滴状の透かしの形態はほとんど変わらない。このことからSX11～西谷2号墓の時期は丹後においては装飾器台の定型化した段階と考えられるであろう。またほとんどの資料がこの時期に相当すると思われる。さらにこの段階をさかのぼる可能性があるものとして正垣遺跡SD05〔第3図-5〕をあげておきたい。

6 おわりに

装飾器台の特性をあげると2点ある。ひとつはその非実用的な形態、もうひとつは出土点数が他の器種に比べ少ないことである。そしてこれらから導き出されてくるのが装飾器台を‘非日常性’のものとする考えである。さらにその背景を復元すると当然考えられる

のが‘祭祀’である。しかし祭祀にもさまざまなものが考えられるため、装飾器台の出土遺構をみるかぎりその祭祀を特定することは難しい。また弥生時代の祭祀自体不明な点が多い。そこでこの‘非日常性’を考える手がかりとして出てきた観点が栃木・宮本両氏の指摘した‘規格性’である。この‘規格性’から考えられるものとして装飾器台の存在した時期が非常に短期間であったのか、もしくは装飾器台自体が変化にとぼしいかなり保守的な性格のものであったかが考えられる。私はこの‘規格性’＝定型化段階と考えており、またそれが時期幅を持つと推定できることから、後者の可能性を指摘したい。

(きしおか・たかひで=当センター)

- 1 諸墨知義「有透穴器台地名表」(『うつわ』創刊号 國學院大学第Ⅱ部考古研) 1986
- 2 熊野正也「特殊な器台形土器について(1)～(3)」(『史館』第3・8・12号史館同人会) 1974・1977・1980
- 3 大塚初重「原目山遺跡出土の土器」(『土師式土器集成Ⅰ』) 1971
- 4 1と同じ
- 5 石井清司「丹後・丹波地方における搬入土器について」(埋蔵文化財研究会第15回研究集会発表要旨) 1984
- 6 橋本澄夫「弥生土器—中部北陸1～4」(『考古学ジャーナル』106・107・109・111) 1975
- 7 栃木英道・宮本哲朗『金沢市南新保D遺跡』金沢市教育委員会 1981
- 8 栃木英道「月影式土器の成立」・宮本哲朗「装飾器台等の展開」(『シンポジウム「月影式土器について報告編」』石川考古学研究会) 1986
- 9 8と同じ
- 10 8と同じ
- 11 石井清司「北金岐遺跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 12 戸原和人「古殿遺跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書』第9冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 13 釋龍雄ほか「途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書」(『峰山町文化財調査報告』第3集 峰山町教育委員会) 1977
- 14 5と同じ
- 15 12と同じ
- 16 竹原一彦「府営は場整備関係遺跡(1)正垣遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 17 音村政一「三重小学校保管遺物」(『同志社考古9』同志社大学考古学研究会) 1972
- 18 後籾公一(『西谷墳墓群現地説明会資料』野田川町教育委員会) 1988
- 19 野田川町教育委員会保管。下川賢司氏の御好意により資料を紹介させていただいた。
- 20 杉原和雄ほか「愛宕山9号墳発掘調査報告書」(『加悦町文化財調査報告』第1集 加悦町教育委員会) 1975。器台上半部はすべて欠損しており全体像はわからない。さらに形態・時期も他のものとまったく相違するためわからない部分が多い。今回の検討においてはほとんどふれていない。
- 21 小山雅人「青野西遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研

- 究センター) 1985
- 22 11と同じ
- 23 瀬戸谷皓「立石墳墓群編」(『北浦古墳群・立石墳墓群』 豊岡市教育委員会) 1987
- 24 田辺常博「南前川遺跡」(『三方町文化財調査報告書』第6集 三方町教育委員会) 1985
- 25 2と同じ
- 26 平良泰久ほか「古殿遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』 1978 京都府教育委員会)
- 27 18と同じ
- 28 肩部に突帯を持つ二重口縁の壺(第5図-14)は愛宕山9号墳、霧ヶ鼻古墳群などで出土しているが、これらは口縁部に擬凹線や鋸歯文を施すものではない。しかし形態等から同一系譜につらなる可能性がある。

〈付記〉本稿の脱稿後、装飾器台が岩滝町千原遺跡から出土していることを石崎善久氏から聞いた。また野田川町教育委員会の後藤・下川両氏にはいろいろとお世話になった。記して感謝の意を表したい。